随想

私の北海道

帯広市　前市長　砂川敏文

砂川　敏文（すながわ　としふみ）氏

昭和23年（1948）1月　香川県大川郡志度町生まれ
昭和41年（1966）3月　香川県立高松高校卒業
昭和45年（1970）3月　帯広畜産大学草地学科卒業
4月　農林省入省
昭和47年（1972）4月　北海道開発庁出向
平成9年（1997）10月　農林省退官
平成10年（1998）4月　帯広市長就任
平成22年（2010）4月　帯広市長退任

いまチュニジア、エジプトはじめ中近東、北アフリカ、中央アジアなどのイスラム世界などで、長期の独裁的政権が国民の反乱にみまわれ、大きく揺れ動いています。地政学的に重要な地域ですので、今後の世界情勢にどのような影響が及ぶかが気になるところです。

二〇一〇年四月、私は三期十二年間勤めた帯広市長を退任しました。市長に限らず権力権限を持つ座に長い間いると、本人や周辺を含め、その権限を悪用したりあるいは故意に不行使するなど、弊害が出てくることは避けられないこと。またその意思はなくても結果として、後に控える若い世代の活躍の場と機会を奪い、伸びる芽を摘んで、長い目で見て地域社会全体に大きな不利益を与えることになるとの考えからです。一九九八年一期目に臨むときから、多選は避け、三期十二年が限度と考えていましたので、改めてわがままを通していただいての決断でした。

在任中最後の市議会となった三月議会で、和歌を二首引用し退任に当たっての私の思いを議員や市民の皆さんにお伝えしました。

「よき国へ　背負いはこぶと　かたつぶり
家の重きに　日は暮れにけり」
「幼らよ　おのおのがいのち　はぐくみて
おほきくなれよ　いくさなき世を」

私の故郷香川県、昔の国名では讃岐の尊敬する先人の歌です。私は香川県大川郡志度町、現在のさぬき市志度の生まれです。「幼らよ・・・」は同じ郡内の出の大先輩の南原繁氏、戦後講和問題で時の吉田首相と論争し、曲学阿世の徒と揶揄されたその人の歌です。

讃岐の国志度の浦

万葉の歌人柿本人麻呂が「玉藻よし　讃岐の国はくにからか見れども飽かぬ神からか・・・」とうたった讃岐の国は、穏やかな自然、風光明媚で、歴史も古く、種々の地域文化が熟成しています。近頃は、年代を問わず四国八十八ヵ所巡りが人気のようですが、お大師さん弘法大師空海は、讃岐の豪族佐伯氏の出で善通寺に生をうけています。さぬき市には八十六番の志度寺、八十七番長尾寺、八十八番結願の大窪寺が所在します。

志度寺の縁起に、海女の珠取りの伝説が残されています。『唐から贈られた宝珠を志度の浦で竜神に奪われた淡海藤原不比等は、珠を取り返すため志度に赴き、在所の海女と契りを結びます。できたわが子を大臣にしてくれるならと海女は海に潜り、竜神から珠を取り戻して死んでしまいます。子供は都で大臣藤原房前になりましたが、出生の秘密を知り、母を追善しようと志度の浦を訪れ、母の亡霊に会い・・・』この話も大人たちから良く聞かされたものです。能の名曲で平安時代から現代まで長く演じられている「海人」、その素材になっている話です。先年、坂東玉三郎の舞台が評判をとりました。

真言宗善通寺派総本山善通寺
（四国霊場75番札所）

志度寺は志度の浦の浜辺にあり「海女の墓」が残されており、子どもの頃、私の格好の遊び場でした。私のふるさとのことを長々と書きましたが、日本列島は四方それぞれ異なった赴きの海に面し、四季が鮮やかで地形も複雑です。

全国津々浦々という言葉がありますが、ひとつの岬、入江を越えるごとにまた港があり集落がある。それぞれに歴史や文化が根着き住民はその伝統を受け継ぎ、誇りを持ち、さらに育んでいるわけです。それら諸国諸地域諸集落が集まって、全体として日本の国を形つくっています。そのひとつの例として讃岐の国志度の浦の話をさせてもらいました。

新しい土地北海道

北海道もそれらのひとつですが、他とは大きく異なった特色を持っています。稗貫郡などいわゆる奥の六郡が置かれ、北東北に律令の体制が及んだのは、ようやく一〇世紀のことといわれています。それまでは北東北は日本の中央畿内からみて化外の地であったわけです。北海道はさらにその向こう側にありました。中世期、その南部沿岸の一部が交易の対象地として認識されていたに過ぎません。幕末期からロシアの南下に備える北辺防備のため蝦夷地の重要性が認識され、箱館（函館）が最初の開港地のひとつとなり、大きく転換することになります。

明治二年開拓使が設置され、国策として拓地殖民政策がすすむとともに、全国各地からの入植者が急増すると同時に、開港地として文化面も含めて欧米の影響に直接さらされるという特殊な状況におかれることになりました。

全国各地や諸外国の人・物・産業・文化など国策としての開拓政策によって新しい土地北海道に移され、そして在来のアイヌの文化などなど多くの異なった要素が、短期間に混合し展開されることになったのです。つまり

一・極めて多くの個性的な要素、外国のものを含めて、混じりあいあるいは融け合っていること。

二・明治期以降としても一五〇年程度の短い時間の経過しか持たないこと。

三・一地域に対し国策としての諸施策が重点的に講じられ、各般にその影響が大きいこと。

などが北海道という地域を日本の他の地域とは大きく異なって特徴づける事柄であると思います。

もとより、そうした人間の営為が展開される舞台としての北海道という島は、他の地域とは隔絶した地理的特色を持っています。冷温帯に属し気候は厳しく、独自の動植物相をもち、地形的にも比較的単純雄大で、本州以南の地域とは条件が異なっています。こうした自然と歴史的な経過を踏まえ、日本の国内に、ひとつの新しい地域を作り上げていく壮大な実験が行われつつあるのが現在の北海道という地域であると私は考えています。

地域が日本をつくる

今、国の行く末を考えるにあたって、「地方分権」さらには「地方主権」ということが大きな課題になっています。地域のもつ特性を生かし住民の力を発揮して自治を進め、地域の活力を高めることが、強くしなやかな日本国を作り、日本人の幸せをより確固たるものにするということです。そこでは、各地域間の激しい競争ということが当然想定さます。しかし、それがあってはじめて、列島全体が多彩で光り輝く地域で満たされ、国民もそれぞれの地域で、心豊かに安心して充実した生活を営むことができるというものです。

地域間競争に打って出て切磋琢磨し、そして勝つためには、そ

の地域の持つ自然や歴史文化、経済産業などに裏づけられ生み出される資源や特性を最大限活用するほかないと思います。

北海道という地域の特性は、先に述べたことに大枠として規定されると思いますが、北海道と一口に言っても広く、道内にも沢山の地方があります。それぞれが短い時間の間にそれぞれの個性を醸し出しつつあります。

十勝帯広も然りです。大雪・日高の山なみを背景に大平野が展け太平洋に面しています。夏暑く冬寒い太陽一杯の自然条件、特にさわやかな夏、天気が良く明るい冬が印象的です。まさに積雪寒冷どころではなく「爽夏明冬」の地といえます。

官主導で進められた他の地方とは異なり、民主導ではじまった開拓の歴史があり、欧州並みの大規模な畑作酪農が展開されるに至っています。そして、そのことを誇りをもって語り継ぐ多くの住民がいます。原野の開拓に大いに力を尽くした大型の農耕馬から発した世界唯一の「ばんえい競馬」。

その風土から自然発生的に生まれ、幼少期から住民全員が親しむスケートは、親たちが学校の陸リンクの造成などで支え、屋内リンクでは世界的大会が頻繁に開かれています。さらに、風土をいかしたお菓子・チーズ・ワインなどは高水準の製品を産出しています。

ばんえい十勝

農業・馬産・畜産・食品加工・食品衛生など地域産業を研究開発や教育の面から帯広畜産大学が支え、文化面では、市民の手でしっかり運営されている帯広交響楽団が地域の芸術文化を支えています。こうしたすばらしい特長を持った諸要素資源を引継ぎ、残しながら、さらに展開し活用の策を進めることが大切になります。そのためには、自分の住む地域を十分理解し、自分たちで育ててさらに良くしていく、という住民の意識が鍵になると思います。なんといっても開拓の歴史は一三〇年、その三分の一を超える時間を身体に染み付かせて地域で生きる住民も数多いのです。讃岐の国など内地の地域では考えられません。その分、今この地で生きている人は、この地域の現状と将来について、他の地域の住民がそうである以上にはるかに大きな影響力をもち、また責任を負っているといえます。

香川県の高校から帯広畜産大学に入学して以来、十勝の風土と人が気に入り、ご縁があって帯広市長を勤めさせていただいた私も、そうした住民の一人として、地域への責任を自覚しながら市政をすすめました。

経営難から存亡の危機にあった四市共催の「ばんえい競馬」を、帯広市単独で継続することとしたのも、スケート場を屋内化しスケートの拠点性をより高めることとしたのも、同じ背景からです。

短い歴史の中で十勝が生み育ててきた、地域の財産を地域間競争にあたっての大きな武器として活用するとともに、地域の産業

帯広の森運動公園

明治北海道十勝オーバル外観

21世紀の北海道

北海道という地域の特質を大枠で規定する事柄のうち、国策が経済文化活動への波及効果を考慮したものです。

大きな影響を与えたという点については、今後は状況が大きく変化すると考えられます。

面積八万平方キロメートルの面積と人口五五〇万人を擁する地域社会で、住民の生活の水準からみても全国平均並みといってよい。この現状については、これまで手厚い国策の恩恵を受けたことが与かって大きな力になっているのですが「今後、これまでと同じように北海道を特別視し、優遇策を講じることについては、国全体としては大いに疑問がある。他の地域と同様の扱いにするべきだ」という世論が大勢を占めるようになってきています。各種の優遇措置も徐々に削られてきているのですが、これまで以上の速度で縮減されていくのは避けられないと思います。わずかに国として考慮しなければならないのは北海道が北方の国境地帯を抱えているということ位ではないか。

このような状況を踏まえながら、北海道は、自然・歴史・文化・人材など全ての持てる資源をあらためて自覚し再評価して、自らの才覚でそれらを最大限働かせていけば、新しい可能性を拓いて成長し、「二一世紀の日本の地域社会の新しいモデルのひとつ」を提示することができる希望の大地であると、私は改めて考えています。

今後とも、讃岐の国生まれで北海道が大好きな一帯広市民として、輝く北海道の姿を楽しみにしつつ応援していきたいと思っている。